＜原著論文＞

# チームスポーツ系運動部におけるコーチのリーダーシップに関する基礎的研究

# A Basic Study on Leadership of the Coaches in the College Sports Teams

畑　　攻[1)]　柴田雅貴[2)]　塚本正仁[3)]　杉山歌奈子[4)]

*Osamu HATA, Masaki SHIBATA, Masahito TSUKAMOTO and Kanako SUGIYAMA*

**Abstract**

Leadership is one of the most important elements for team sports management, and concerning to members morale, team morale, maturity, and performance. In sports science area, it is expected that sports leadership would be defined and clarified to attain their objective.

The purpose of the study was to identify sports leaders' behavior and function concerning with members' satisfaction. This study employed a specially designed questionnaire which were consisted of general demographics, academic year, skill level, influenced level of their leaders, leadership scale for sports, and members satisfaction. The sample population included two athletic teams for A(n-95) and B(n-45) in Japan Women's College of Physical Education.

Multivariate statistical procedures such as factor analysis, regressions, and adequate statistical test were applied. The following results were obtained.

1. Original 4 factors for team sports leadership behavior which were consisted of (F1) on the floor operation, (F2) independency promotion, (F3) attainment promotion, and (F4) action and play promotion were identified.
2. Specific function of team sports leadership was clarified, according to characteristic of members, small groups, clubs, and each organizational factor.

***keywords :*** *Leadership, Sports Coach, Sports Team*

## Ⅰ．研究の背景・目的

勝利を目指して活動する競技集団としての運動部においては，競技成績は最も代表的な成果の一つである．そのような成果は，一般的には選手及びチームの競技力が結果としての勝敗を大きく左右し，中心的に取り上げられることは当然のこととなろう．コーチ学の立場から，加藤（1998）[9)]は，競技力を「体力＋技術＋戦術＋知的・精神的能力＋$\alpha$（運・その他など）」に要約している．このような競技力が勝因につながることは当然のことではあるが，実際には，上記の競技力の総和がストレートに可視的に結果（勝敗）に結びつくというものではなく，また，現段階においては，さらに精密な競技力の構造の解明や機能の追求が課題であるものと考えられる．すなわち，運動部の目標や成果としての競技成績に代表されるシンプルな成果に比較して，その成果を規定する要因は，実に多岐にわたり複雑に交互作用していることが指摘される．それらは例えば，体力が技術に影響したり，技術が戦術を規定したり，あるいは精神力が体力に影響したりなどのように，競技力の各要素が相互に関連しあう応用的なメカニズムの解明が重要である．

そのような状況において，本研究では，選手・部員のマンパワーに注目し，いわゆる「やる気」や「闘志」，「主体性」の部分のメカニズムを検討しようとする．どのスポーツ種目の活動においても，各コーチのはたらきかけが選手・部員に対して，練習場面や試合をはじめとする様々な機会を通して影響力をもつことは当然であるが，特にチームスポーツ系のコーチの判断や行動が重要な意味を持つことに着目した．そのような影響力は主として，加藤が要約する精神的能力およびプラス・アルファの部分に相当し，部員・選手の満足お

1）日本女子体育大学（教授）
2）日本女子体育大学（講師）
3）日本女子体育大学（講師）
4）慶応義塾幼稚舎

よび能動性が媒介となって，結果としての競技力に影響するものと考えられる．これらの能力は，スポーツ心理学やコーチ学の一部の分野においても検討されているが，スポーツマネジメントの分野からのアプローチも少なくはない状況である．

そのようなコーチの選手･部員へのはたらきかけは，チームマネジメントおよびクラブマネジメントとして取り上げることができるとともに，基本的にリーダーシップ論としての研究的なアプローチが可能となる．すなわち，ここでのリーダーシップとは，コーチの部員・選手への種々のはたらきかけや技術指導などを広く含んだ包括的な影響力として位置づけることができる．

過去におけるリーダーシップ研究は，1940年代にさかのぼり，初期のリーダーシップ論は有能なリーダーに共通する性格的特徴や身体的特徴などを論じた「特性理論」であった．しかし，この視点からの有能なリーダーの共通像は有意に見出されることはなかった．そのような特性論に代わって指導者の行動に着目した「リーダーシップ行動論」が登場した．リーダーの行動を「目標追及」と「配慮」の２つの次元で明確に捉えた三隅の PM 理論(1966)[10]に代表され，企業や学校をはじめとするさまざまな集団に適用がなされ，スポーツ集団においても活用されている．

その後，各領域の集団や組織の特性や，それらを取り巻く環境や状況との関係に注目が集まり，対象集団の特性や状況に応じて機能するリーダーシップの「状況適合理論」が注目されるようになっている．普遍化された一般集団のリーダーシップ論から，対象集団に応じたリーダーシップの研究に移行しており，スポーツの分野では，P. Chelladuarai（1988）[4]のスポーツ・リーダーシップ研究が代表的である．日本のスポーツ集団に固有な部員のモラール（士気）やマチュリティ（成熟度）との関係を検討した鶴山ら（1996）[18]の研究，大学女子陸上競技部のリーダーシップ行動を具体化した杉山ら(1998)[17]の研究では，対象スポーツ集団対するに固有･個別のリーダーシップを明らかにしている．

本研究は，それらの先行研究をふまえて，特に本学のチームスポーツ系の２つの運動部のコーチのリーダーシップ行動に焦点をあて，選手・部員の満足度とリーダーシップとの関連を中心に分析・考察し，運動部員の状況に適合する，より実践的なリーダーシップの内容とその構造を明らかにしようとする．さらに，対象集団の特性や，部員の特性に応じたリーダーシップ機能を基礎的に検討するものである．

## II．研究の方法

調査項目は①集団特性［所属運動部，所属部内小集団（ブロック）］②部員特性［学年，選手レベル，競技戦績，指導者から受ける影響（５段階スケール）］③指導者の行動に関する「リーダーシップ」④部員の指導者や結果に対する「満足度」を設定した．

本研究の中心となる「リーダーシップ」と「満足度」は，先行研究である杉山らの大学競技運動部員のリーダーシップ19項目と，部員の２つの満足度（リーダーシップに対する満足度と結果に対する満足度）の２因子から項目を選択した．これらの項目を因子分析し，抽出された因子の妥当性及び構造を検討した．また，抽出されたリーダーシップ因子をスコア化し，集団特性，部員特性との関係から比較し，各特性に応じたリーダーシップ因子の反応を考察した．さらに，部員の満足度を目的変数，リーダーシップ因子を説明変数として重回帰分析を行い，部員の満足度に影響を与えるリーダーシップ機能を検討した．

調査は，日本女子体育大学の２つのチームスポーツ系運動部員に対して2003年７月に実施した（回収率：88.2%）．有効標本数は表１に示す通り，A 部員95名，B 部員45名であった．

表１　調査対象

| チーム系A部 | チーム系B部 | 合計 |
|---|---|---|
| 95 | 45 | 140 |
| 67.9% | 32.1% | 100% |

## III．結果と考察

### １．対象者の特性

表２に示すとおり，A 部 B 部ともに競技レベル別に部内小集団に分かれており，A1ブロック，A2ブロック，A3ブロック，B1ブロック，B2ブロックで構成されている．競技レベルの比率は，一般選手が過半数以上を占め，公式試合に出場するレギュラー正選手と，補欠選手，一般選手に分かれ，公式試合で起用されるレギュラー選手が限られているため，正選手の割合が低くなっている．

### ２．「リーダーシップ」項目に対する基礎的反応

表３は，部別のリーダーシップ19項目の基本統計を

表２　対象者のデモグラフィック

| | A部 N＝95 f(%) | | B部 N＝45 f(%) |
|---|---|---|---|
| （ブロック） | | | |
| A1ブロック | 21(20.0) | B1ブロック | 26(57.8) |
| A2ブロック | 44(46.3) | B2ブロック | 19(42.2) |
| A3ブロック | 30(31.6) | | |
| （学年） | | | |
| 1年生 | 36(37.9) | | 12(26.7) |
| 2年生 | 15(15.8) | | 15(33.3) |
| 3年生 | 21(22.1) | | 9(20.0) |
| 4年生 | 23(24.2) | | 9(20.0) |
| （選手レベル） | | | |
| 正選手 | 5(5.3) | | 6(13.3) |
| 補欠選手 | 5(5.3) | | 6(13.3) |
| 一般選手 | 55(57.9) | | 29(64.4) |

表３　リーダーシップの基本統計

| | A部 N=95 | | B部 N=45 | |
|---|---|---|---|---|
| | M | SD | M | SD |
| 部の目標は部員に決めさせる | 3.78 | 1.023 | 4.04 | 0.878 |
| トレーニングメニューに部員の意見を反映させる | 3.58 | 0.963 | 3.33 | 1.087 |
| 部員個人に目標を設定させる | 4.00 | 0.875 | 3.84 | 1.167 |
| それぞれの部員に何が期待されているのかを明確にする | 3.53 | 0.944 | 3.29 | 1.308 |
| 年間の練習・試合・行事などの計画を部員に立てさせる | 3.21 | 0.988 | 3.09 | 1.203 |
| 計画を活用して活動を進める | 3.61 | 0.926 | 3.20 | 1.140 |
| いつも部員を励ます | 3.41 | 1.016 | 2.84 | 1.296 |
| 部員のやるべきことを明確にする | 3.67 | 1.076 | 3.44 | 1.139 |
| 部をひっぱっていく | 3.40 | 1.115 | 3.16 | 1.127 |
| 雰囲気作りに気を配っている | 3.36 | 1.148 | 3.02 | 1.158 |
| 全体をうまく統率している | 3.49 | 1.081 | 3.02 | 1.118 |
| 全員が努力出来るように配慮する | 3.62 | 1.012 | 3.18 | 0.984 |
| その時の状況に応じて指導する | 3.82 | 1.031 | 3.49 | 1.036 |
| 必要な技術や作戦などをわかりやすく説明する | 3.83 | 1.028 | 3.40 | 1.031 |
| 指導に関する情報が豊富である | 3.85 | 1.120 | 3.42 | 1.011 |
| 合理的な練習法を用いる | 3.66 | 1.107 | 3.24 | 1.048 |
| 練習に一貫性がある | 3.68 | 1.123 | 3.22 | 1.241 |
| 1つ1つの練習の意味を明確に説明する | 3.86 | 0.952 | 3.16 | 1.127 |
| 運動と休養のバランスを考えた適切な練習の設定をする | 3.53 | 0.909 | 3.22 | 1.223 |
| 部員の体調管理に注意を払う | 3.65 | 0.872 | 3.24 | 1.090 |
| 怪我をしたときに応急処置ができる | 3.57 | 1.127 | 3.71 | 0.944 |
| 練習をよく見に来る | 3.77 | 1.224 | 3.40 | 1.136 |
| 部員をよく理解しようとしている | 3.73 | 1.198 | 3.24 | 1.209 |
| 部のあり方をよく考える | 3.75 | 1.000 | 3.31 | 1.184 |
| 新しい練習法を取り入れようとする | 3.53 | 1.128 | 3.64 | 1.151 |
| 部員によく声をかける | 3.75 | 1.000 | 3.40 | 1.009 |
| 部員がよいプレーをした時に誉める | 3.75 | 1.081 | 3.49 | 1.079 |
| それぞれの部員の貢献を認める | 3.71 | 1.030 | 3.36 | 1.190 |
| 失敗した時、具体的な改善点や方法を指示する | 3.76 | 1.049 | 3.20 | 1.160 |

示したものである．A部，B部ともに部員の高い評価を受けたリーダーシップ行動は「部員個人に目標を設定させる」や「部の目標は部員に決めさせる」といった目標設定に対する主体性の促進行動であった．また，A部では「１つ１つの練習の意味を明確にする」や「指導に関する情報が豊富である」なども次いで高い評価であった．B部では「新しい練習法を取り入れようとする」が高い評価であった．類似のチームスポーツ集団であっても，部ごとに異なるリーダー行動の特徴が明らかであった．

### ３．「リーダーシップ」の因子構造

表４は，「リーダーシップ」19項目を，主因子法によって抽出された各因子の固有値1.0以上を基準にして因子を決定した結果である．５因子が抽出され，因子の単純構造を得るためにNormal-Varimax法による直交回転を施し，因子負荷量0.500以上の項目を取り上げて因子の解釈・命名を行った．

表４　リーダーシップの因子構造

リーダーシップの因子構造

| 変数 | アイテム | 寄与率 | 負荷量 |
|---|---|---|---|
| 第1因子 | ＜F1＞　活動場面での対応(的確な対応) | 58.169% | |
| 27 | 部員がよいプレーをした時に誉める | | 0.784 |
| 25 | 新しい練習法を取り入れようとする | | 0.759 |
| 22 | 練習をよく見に来る | | 0.756 |
| 28 | それぞれの部員の貢献を認める | | 0.726 |
| 15 | 指導に関する情報が豊富である | | 0.720 |
| 24 | 部のあり方をよく考える | | 0.711 |
| 23 | 部員をよく理解しようとしている | | 0.671 |
| 26 | 部員によく声をかける | | 0.644 |
| 19 | 運動と休養のバランスを考えた適切な練習の設定をする | | 0.594 |
| 21 | 怪我をしたときに応急処置ができる | | 0.576 |
| 4 | それぞれの部員に何が期待されているのかを明確にする | | 0.516 |
| 第2因子 | ＜F2＞　自主性の促進 | 5.630% | |
| 1 | 部の目標は部員に決めさせる | | 0.752 |
| 3 | 部員個人に目標を設定させる | | 0.714 |
| 5 | 年間の練習・試合・行事などの計画を部員に立てさせる | | 0.679 |
| 2 | トレーニングメニューに部員の意見を反映させる | | 0.551 |
| 第3因子 | ＜F3＞　目標達成の促進 | 4.094% | |
| 14 | 必要な技術や作戦などをわかりやすく説明する | | −0.760 |
| 11 | 全体をうまく統率している | | −0.735 |
| 12 | 全員が努力できるように配慮する | | −0.691 |
| 13 | その時の状況に応じて指導する | | −0.684 |
| 9 | 部をひっぱっていく | | −0.628 |
| 第4因子 | ＜F4＞　活動の促進 | 3.528% | |
| 7 | いつも部員を励ます | | 0.687 |
| 6 | 計画を活用して活動を進める | | 0.589 |
| 8 | 部員のやるべき事を明確にする | | 0.587 |
| 10 | 雰囲気づくりに気を配っている | | |
| 16 | 合理的な練習法を用いる | | |
| 17 | 練習に一貫性がある | | |
| 18 | 1つ1つの練習の意味を明確に説明する | | |
| 20 | 部員の体調管理に注意を払う | | |
| 29 | 失敗したとき、具体的な改善点や方法を指示する | | |

第１因子に高い負荷量を示した項目は，「部員がよいプレーをしたときに誉める」や「新しい練習法を取り入れる」などの『F1：活動場面での対応(的確な対応)』であった．第２因子は，「部員個人に目標を設定させる」や「トレーニングメニューに部員の意見を反映させる」などの『F2：自主性の促進』であった．第３因子は，「全体をうまく統率している」や「全員が努力できるように配慮する」などの『F3：目標達成の促進』であった．第４因子は，「いつも部員を励ます」や「計画を活用して活動を進める」などの『F4：活動の促進』であった．

また「雰囲気づくりに気を配っている」や「合理的な練習法を用いる」などの負荷量の低い項目や複数の因子に同時に高い負荷量を示した６項目は除外した．

これら統計的な手法によって抽出された『活動場面での対応』，『自主性の促進』，『目標達成の促進』，『活動の促進』は，先行研究である大学競技運動部のリー

ダーシップ因子「指導」,「主体性の促進」,「練習への参加」,「気配り・目配り」と比較して，チームスポーツの特性に応じた，より具体的な内容を示すリーダーシップ行動として妥当な因子構造を示している．

### 4．リーダーシップ因子スコアの反応

表5・図1は，抽出されたリーダーシップ4因子をスコア化し，集団特性で異なる部内小集団(ブロック)別に比較した結果である．A部，B部ともにレギュラー選手で構成されるA1ブロックがすべてのリーダーシップ因子において反応が高く，指導者のリーダーシップ機能が強く働いていることを示している(表6・図2)．次いで，高いのは一般選手で構成されるA3ブロック，補欠選手で構成されるA2ブロックはA部，B部ともに他ブロックと比較して低い反応であった．現状では，レギュラーを目指す補欠選手については，特に正選手や一般選手よりも手厚い指導やはたらきかけが必要であることを示唆している．

表7・図3は，学年別に因子比較した結果である．B部の学年間でリーダーシップ因子反応に差が見られた．『自主性の促進』と『活動の促進』で2年生と1年生の反応が高いことから，高校を卒業して間もない1，2年生にとっては自分で練習計画を立てたり，目標をたてるといった自主性の促進は非常に効果的に機能していると考えられるが，3，4年生に対しては1，2年生とは異なった方法で自主性を促進をしてゆく必要性が示唆される．また，いつも部員を励ますといった活動の促進についても，同じ傾向が見られた．A部では，学年間で有意な差は見られなかった．

表8・図4は，選手レベル別に因子比較した結果である．A部において『活動場面での対応』,『目標達成の促進』,『活動の促進』で正選手の反応が有意に高く，次いで一般選手であった．指導者の影響を受けて自主的に練習に励む正選手と，指導者の影響を受けにくい補欠選手との差であるものと考えられる．B部においては選手レベルごとの差は見られなかった．

以上のことから，部内の小集団としてのブロックという集団特性においても，学年や選手レベル間においても，それぞれの集団に特徴的なリーダーシップ反応を示した．これらの結果は，リーダーシップが集団の特性に応じて個別に機能していることを示している．

表5・図1　A部　ブロック別「リーダーシップ」因子スコア比較

| | A1ブロック N=21 | | A2ブロック N=44 | | A3ブロック N=30 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | M | SD | M | SD | M | SD | F値 |
| F1　活動場面での対応 | 0.889 | 0.403 | −0.560 | 0.888 | 0.503 | 0.713 | 31.964*** |
| F2　自主性の促進 | 0.458 | 0.654 | −0.374 | 0.968 | 0.316 | 0.985 | 7.828*** |
| F3　目標達成の促進 | 0.950 | 0.551 | −0.389 | 0.958 | 0.324 | 0.787 | 19.069*** |
| F4　活動の促進 | 0.800 | 0.641 | −0.341 | 0.907 | 0.374 | 0.661 | 16.67*** |

*** P<0.001

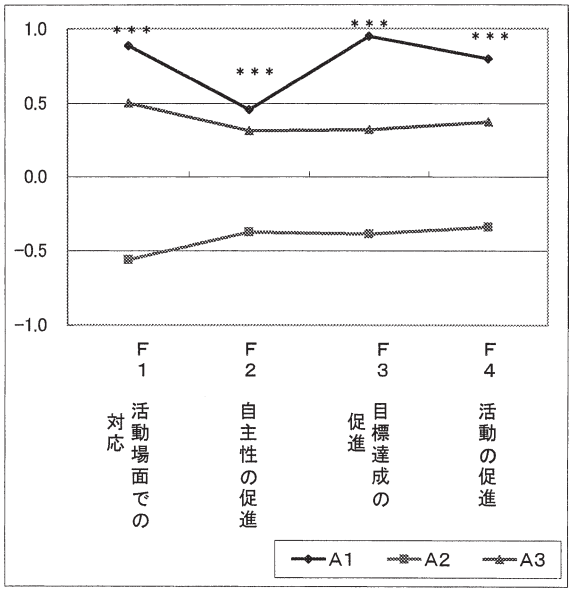



表6・図2　B部　ブロック別「リーダーシップ」因子スコア比較

| | B1ブロック N=26 | | B2ブロック N=19 | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | M | SD | M | SD | F値 |
| F1　活動場面での対応 | −0.073 | 0.662 | −0.380 | 1.334 | 1.030 |
| F2　自主性の促進 | −0.342 | 0.748 | 0.330 | 1.203 | 5.067 |
| F3　目標達成の促進 | −0.249 | 0.864 | −0.320 | 1.100 | 17.897 |
| F4　活動の促進 | −0.176 | 0.914 | −0.443 | 1.319 | 1.631 |

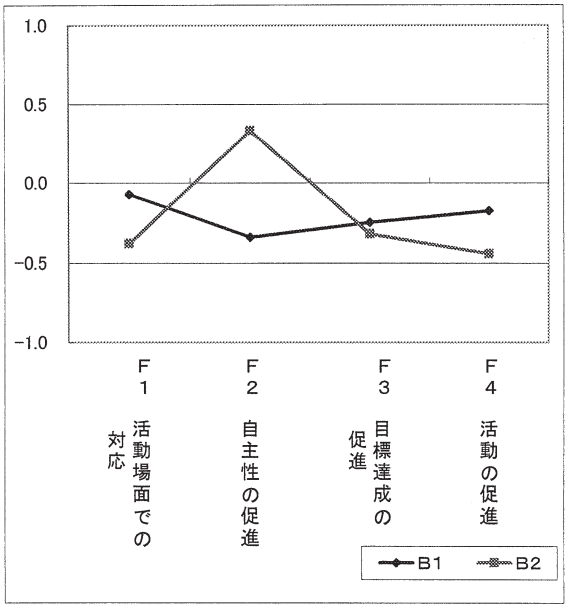


表７・図３　Ｂ部　学年別「リーダーシップ」因子スコア比較

| | 1年生 N=12 | | 2年生 N=15 | | 3年生 N=9 | | 4年生 N=9 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | M | SD | M | SD | M | SD | M | SD | F値 |
| F1 活動場面での対応 | 0.262 | 0.586 | −0.063 | 1.073 | −0.735 | 1.363 | −0.522 | 0.507 | 2.148 |
| F2 自主性の促進 | 0.255 | 0.723 | 0.327 | 1.040 | −0.681 | 1.068 | −0.496 | 0.787 | 3.075* |
| F3 目標達成の促進 | −0.135 | 0.824 | 0.025 | 0.969 | −0.449 | 1.186 | −0.805 | 0.593 | 1.574 |
| F4 活動の促進 | 0.186 | 0.377 | 0.009 | 1.201 | −0.854 | 1.123 | −0.854 | 1.110 | 2.924* |

* P<0.05

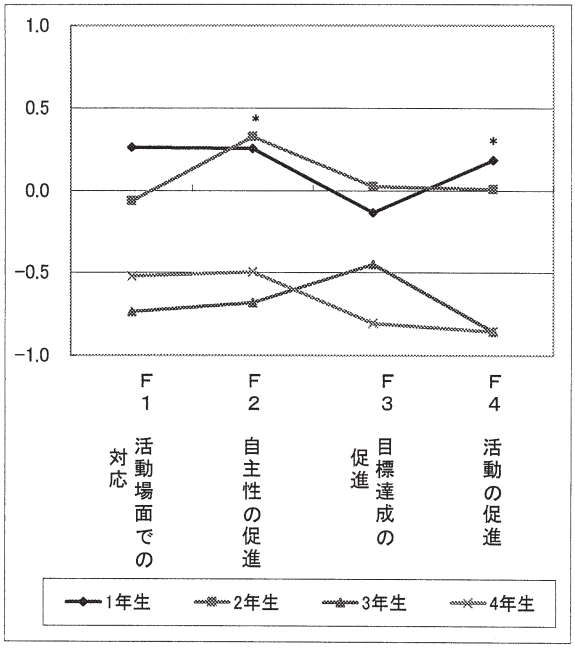
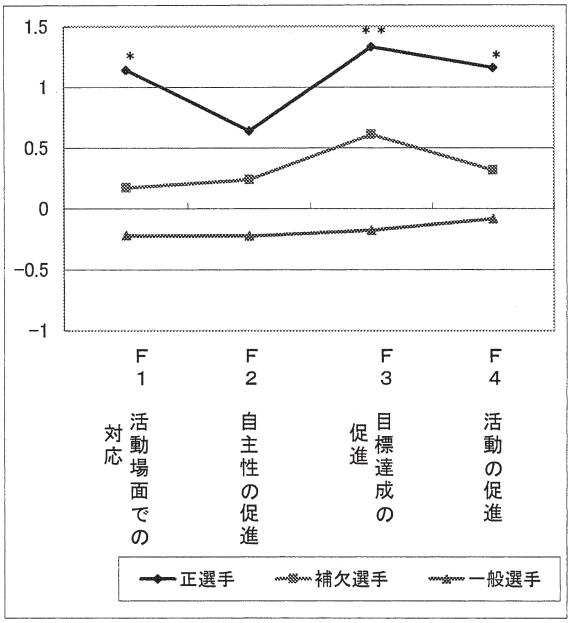



表８・図４　Ａ部　選手別「リーダーシップ」因子スコア比較

| | 正選手 N=5 | | 補欠選手 N=5 | | 一般選手 N=55 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | M | SD | M | SD | M | SD | F値 |
| F1 活動場面での対応 | 1.143 | 0.162 | 0.173 | 0.431 | −0.219 | 1.028 | 4.638* |
| F2 自主性の促進 | 0.639 | 0.619 | 0.238 | 0.647 | −0.223 | 0.994 | 2.178 |
| F3 目標達成の促進 | 1.334 | 0.341 | 0.608 | 0.627 | −0.176 | 0.998 | 6.726** |
| F4 活動の促進 | 1.163 | 0.479 | 0.315 | 0.685 | −0.083 | 0.978 | 4.152* |

** P<0.01 * P<0.05




実際現場で指導にあたる監督やコーチは，個々に応じた指導やはたらきかけと同時に，勝つために集団を方向づけるリーダーシップが必要とされ，対象集団に個別に機能するより緻密なリーダーシップの重要性を示しているものと考えられる．

## ５．部員の満足度と「リーダーシップ」の規定関係

ここでは抽出された「リーダーシップ」因子のそれぞれが，部員の満足度に与える規定力を分析・考察した．２つの満足度は，杉山の先行研究による「リーダーシップに対する満足度」と「結果に対する満足度」を用いた．これらの満足度を目的変数とし，本研究で抽出した「リーダーシップ」の４因子を説明変数として重回帰分析を行った．多変量解析法の中で最もよく用いられている重回帰分析は，幾つかの原因と結果の因果関係を明確にするものであり，部員の満足度に規定力を持つリーダーシップの内容を明らかにし，部員の状況に応じたリーダーシップの基本的なあり方を検討するものである．

表９　Ａ部　「リーダーシップに対する満足度」の規定要因

| 因子名 | 標準偏回帰変数 | F値 |
|---|---|---|
| 活動場面での対応(的確な対応) | 0.367 | 4.729** |
| 自主性の促進 | 0.15 | 1.951 |
| 目標達成の促進 | 0.203 | 1.237 |
| 活動の促進 | −0.053 | 0.117 |
| 重相関係数 | 0.61 | |
| 分散比 | 13.26*** | |

*** P<0.001 ** P<0.01

表10　Ｂ部　「リーダーシップに対する満足度」の規定要因

| 因子名 | 標準偏回帰変数 | F値 |
|---|---|---|
| 活動場面での対応(的確な対応) | −0.265 | 1.163 |
| 自主性の促進 | 0.050 | 0.094 |
| 目標達成の促進 | 0.083 | 0.145 |
| 活動の促進 | 0.576 | 5.841** |
| 重相関係数 | 0.48 | |
| 分散比 | 2.98* | |

** P<0.01 * P<0.05

表９および表10は，Ａ部員とＢ部員の「リーダーシップに対する満足度」の規定要因を示したものである．部員の指導者に対する満足に影響を与えるリーダーシップは，部別で異なり，Ａ部では『活動場面で

表11　A部　「結果に対する満足度」の規定要因

| 因子名 | 標準偏回帰変数 | F値 |
|---|---|---|
| 活動場面での対応(的確な対応) | 0.238 | 1.610 |
| 自主性の促進 | 0.022 | 0.035 |
| 目標達成の促進 | 0.383 | 3.555** |
| 活動の促進 | −0.179 | 1.069 |
| 重相関係数 | 0.47 | |
| 分散比 | 6.44*** | |

*** P<0.001 ** P<0.01

表12　B部　「結果に対する満足度」の規定要因

| 因子名 | 標準偏回帰変数 | F値 |
|---|---|---|
| 活動場面での対応(的確な対応) | −0.055 | 0.041 |
| 自主性の促進 | −0.095 | 0.286 |
| 目標達成の促進 | 0.005 | 0.0004 |
| 活動の促進 | 0.348 | 1.781*** |
| 重相関係数 | 0.28 | |
| 分散比 | 0.84 | |

*** P<0.001

の対応』，B部では『活動の促進』であった．同じチームスポーツ系の運動部であっても，部員の指導者への満足度の規定要因は異なっており，A部員は，練習や試合などで指導者が的確に指示を出してくれたことに満足し，B部員は，励ましや，練習に取り組みやすくなるような指導者のはたらきかけに対して満足していることを示している．チームスポーツでは，指導者の采配が勝敗に影響を与えたり，チーム練習の成果も指導者の判断にかかっており，各部の状況に応じた，必要なコーチのはたらきかけのポイントが異なっていることを示している．

表11および表12は，A部員とB部員の「結果に対する満足度」の規定要因を示したものである．部員の成績向上や試合での成果や達成満足に影響するリーダーシップ因子は，A部，B部ともに『目標達成の促進』であった．勝つことを目標としてチーム一丸となって練習に励む運動部においては，最終的な目標を達成できるようなリーダーシップが最も重要であることを示している．

## Ⅳ．まとめ

本研究は，本学の2つのチームスポーツ系の運動部のコーチの「リーダーシップ」が選手・部員の反応から，どのような構造で出現し，対象集団においてどのように機能しているかを分析・検討した．その結果，妥当なコーチのリーダーシップ4因子が抽出された．それらは，『活動場面での対応』『自主性の促進』『目標達成の促進』『活動の促進』であった．

所属ブロック，競技レベル，学年で異なる対象集団において，リーダーシップ因子スコアの反応が特徴的であり，対象集団に応じたリーダーシップ機能が明確になった．さらに，部員の満足度に対するリーダーシップ因子の規定力としての重みづけ（ウエイト）が明確になり，現在の部員に応じた各コーチのリーダーシップ行動のポイントが明確に示された．

スポーツ集団におけるコーチのリーダーシップは，競技力の要素である体力・技術・戦術＋$\alpha$の部分に，選手や組織を活性化させるはたらきかけとして欠かせない要素の一つであることを示すとともに，今後のより的確なコーチ行動（マネジメント）の解明につながる可能性を示したものと考える．

### 参考文献


1）Chelladurai, P. (1993) LEADERSHIP. HANDBOOK OF RESEARCH ON PSYCHOLOGEY MACMILLAN -PUBLISHING COMPANY : 647-671

2）Chelladurai, P. (1993) Leadership in sports. International Journal of Sports Psychology 21 : 328-354

3）Chelladurai, P., Sslen, S.D. (1980) Dimension of leader behavior in sports Development Of Leadership scale. Journal of sport Psychology 2 : 34-45

4）Chelladurai, P., Imanura, H., Yamaguti, Y., Oinuma, Y., Miyauti, T. (1988) Sports Leadership in Cross -National Setting. Joural of Sports & Exercise Psycho-logy 10 : 374-389

5）江口　潤（1999）「競技者満足に関する研究－大学競技者の事例－」日本体育学会第50回記念大会：367

6）F. ハーズ・バーグ（1978）北野利信訳「仕事と人間　動機づけ－衛生理論の新展開」東洋経済新報社

7）藤田雅文（1980）「競技的運動クラブのマネジメント」日本体育学会第31回大会号　p.472

8）藤田雅文（1980）「競技的運動クラブのマネジメント第２報」日本体育学会第32回大会号　p.470

9）加藤　昭（1988）能力アップのための記録・能力分析（畑攻編，体育の学習指導と経営に生きるパソコン），ニチブン

10）三隅二不二（1966）「リーダーシップ行動の科学」有斐閣

11）三隅二不二（1986）「リーダーシップの科学」講談社

12）野中郁二郎（1980）「経営管理」日本経済新聞社

13）文部省体育局（1999）「みんなでつくる運動部活動」文部省

14）中野　繁，加藤茂夫共著（1987）「行動科学と組織革新」泉文堂

15）小笠原悦子，松岡広高，八代　勉，柳沢和雄，川西正志（1997）「大学競技スポーツのコーチの職務満足に関する研究」日本体育学会第48回大会：357

16）P. ハーシ・K. ブランチャード（1978）山本成二訳「行動科学の展開～人的資源の活用～」日本生産性本部
17）杉山歌奈子（1998）「競技スポーツ集団におけるリーダーシップに関する研究」日本女子体育大学平成11年度修士論文
18）鶴山博之，畑　　攻，渡部　誠，武田　一（1997）「競技スポーツ集団としての陸上競技部の指導に関する研究」陸上競技紀要　10：25-33　㈶日本陸上競技連盟
19）鶴山博之，畑　　攻，渡部　誠，武田　一（1996）「リーダーシップから見た陸上競技部のマネジメントに関する基礎的研究」陸上競技紀要　9：21-29　㈶日本陸上競技連盟
20）鶴山博之，畑　　攻，渡部　誠，武田　一（1995）「選手のマチュリティから見た陸上競技部のマネジメントに関する基礎的研究」陸上競技紀要　8：42-48　㈶日本陸上競技連盟
21）鶴山博之，畑　　攻，渡部　誠，武田　一（1994）「モラールから見た陸上競技部のマネジメントに関する基礎的研究」陸上競技紀要　7：29-35　㈶日本陸上競技連盟

（平成15年9月24日受付
平成15年11月20日受理）